

全科協 News

vol.53
NO.6

CONTENTS

P2 ▶特集

P10 ▶海外博物館事情

P12 ▶11月12月の特別展等

P14 ▶リニューアル情報

P16 ▶トピックス

特集

博物館の資源活用



JCSM
apanese Council of Science Museums Newsletter

全国科学博物館協議会

〒110-8718 東京都台東区上野公園 7-20 国立科学博物館内
TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899
<https://jcsn.jp/>

博物館の資源活用

令和5年4月から施行された改正博物館法では、博物館の事業として新たに、多様な主体との連携により、「文化の振興、文化観光その他の活動の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与するよう努める」ことが盛り込まれた。すでに様々な形で連携を行っている施設もあり、博物館が持つ資源であるモノ（資料）、ハコ（建物）、ヒト（学芸員等）を、調査研究や教育普及といったこれまでの博物館本来の業務以外に活用する例が多くみられるようになってきた。

今回は博物館の資源活用をテーマとして4件の事例について報告をいただいた。

映画等の撮影にも多く利用されている国立科学博物館からは、撮影やイベント等への施設の貸出しについて報告いただく。九州大学総合研究博物館からはキャンパス移転によって生まれた空間を活用した取組を報告いただく。小樽市総合博物館からは豊富な写真資料の漫画へ活用とその後の展開などについて報告いただく。4件目は株式会社フェリシモ様に執筆をお願いし、博物館資料をモチーフにした商品の開発など博物館とコラボレーションしたミュージアム部の活動について報告いただく。

いずれも建物や資料を活用したものだが、それぞれにユニークな視点を持った事例となっている。今後の参考としてお役立ていただければ幸いである。

川崎市青少年科学館（かわさき^{こども}宙と緑の科学館） 天文担当係長 弘田 澄人



博物館施設の貸出し

国立科学博物館 科学系博物館イノベーションセンター
マーケティング・コンテンツグループ 中村 くみの

科博の貸出し事業概要

国立科学博物館（以後、科博）では、昭和6年建築の日本館と平成14年に建築された地球館の展示スペースや講堂、会議室を博物館としての業務に差支えない程度に貸し出すことを想定し、閉館日（主に月曜日）や閉館時間（主に午前7時から午前9時と午後5時から午後10時）に、一般に有料で貸出す事業を行っています。令和3年度（2021年度）には規程や細則を策定し、料金も改定するなど、より効果的で効率よく運用できるように体制の改善に取り組みつつ実施しています。

貸出しにはスチール撮影、映像撮影、学会・講演、イベントといった4種で利用されています。施設貸出を検討されている施設の参考まで、それぞれの事例や特性を紹介します。

スチール撮影

まず科博での貸出しの6割強を占めるのが、婚礼写真等のスチール撮影です。リーズナブルな料金設定で、会議室を除く科博のほぼ全施設で撮影が可能であることと、平成20年に国の重要文化財に指定された日本館の古典美や地球館のダイナミックな展示スペースといったバラエティ豊かな撮影場所の提供により、婚礼写真、ファッションブランド写真、アーティスト写真といったあらゆる用途で支持されています。特に婚礼写真では、恐竜好きの新郎新婦がフタバスズキリュウの前や化学好きカップルが元素記号の後ろに立って撮影するなど、こちらの想定内・想定外のあらゆる場所で思い思いに華やかなウェディングドレス姿とタキシード姿で撮影されています。このような科博や科学に思い入れのあるカップルだけではなく、著名な写真家による撮影の影響も大きく、その方が撮影したスタンドグラスのある回廊や旧正面玄関などのスポット、大型哺乳類が展示された展示スペースでの幻想的で美しい構

図を参考にした豪華で壮麗な婚礼写真の撮影場所という新たな価値の創出にもなっています。



科博正面玄関



日本館回廊

映像撮影

映像撮影は、ミュージックビデオ、ドラマ、映画、CM、テレビ番組での使用が多く、また同じアーティスト制作スタッフが複数回ご利用するという特徴があります。複数回利用した方から伺った話の印象では、ほかの商業的貸出し施設に比較して、使用上規制が厳しいことや利用時間の制限があることを除けば、立地・料金・施設の価値や魅力があるため、慣れれば使い勝手が良く、見栄えがすることが理由になってい

るようです。例えばドラマ撮影では、スタジオで作り込まなくてもレトロな雰囲気の撮影セットが組みやすい日本館各所、CM撮影では講堂がよく使用されています。映像撮影では、持ち込む機材の種類や数量が多いことやセットの建てこみがあるので、特に日本館利用時は搬入搬出経路および機材の仮置き場に厳重な養生を施してもらいます。また養生テープでも跡が残ってしまうため、床や壁には直接貼らないようにするなどの細かい対応もお願いしています。

もう一つの特徴としては、問合せ件数が多いのに比べて実施件数が少ないことが挙げられます。それは、関係者数が多かったり限られた撮影日数だったりでぎりぎりの調整をするため、時間的制限が設けられている科博以外の施設を利用することがあるようです。

会議

学会や会議、カンファレンスでの会議室利用としても件数は多くありませんが利用希望をいただいています。人気の理由は、映像撮影と同じく立地と料金が大きいようです。上野駅から徒歩5分程度と近いと、特に学会では日本全国または世界各国から集まるには利便性が高いと聞いています。料金も同等の都内主要駅近辺の施設の約1/10程度の料金設定であることからお問合せはよくいただきます。会議利用に関わらず施設の貸出しは基本的に多くても連続した3日間程度を想定していますが、例外として科博の研究者が所属する学会では1週間程度の貸出しもしています。

イベント

イベントは、講演会、ワークショップ、コンサート、新商品発表と幅広い用途で利用されています。講堂だけでなく各種会議室が用途や人数に応じて選べることから利用実績の25%強を占めています。例えば、展示室スペースにある地球館の講義室から直接展示室にアクセスできるため展示に関する講演やワークショップなど体験型講座でよく利用されています。

また、コンサートや企業イベントでの貸出しは、そのほかの貸出しと異なり、想定外の懸念が生じやすく準備や館内外各所との調整に時間を要するため特に気を付ける必要があります。特に留意しているのは、事前に提出いただく企画書の内容と完成度で、企画内容はもちろんのこと、当日の設営・人員配置・持ち込み機材・スタッフ数など細かく確認して貸出しの決定をすることがトラブル回避の重要な因子となります。



地球館B2階展示室

す。実際にプロだから大丈夫だろうとイベント会社を通じて受けた案件で企画書の情報不足や不備の穴を埋める作業に時間を要することとなり、「施設の貸出し」だけでなくイベント補助に人員を割かねばならない状況に陥ったことがありました。この経験から「施設貸出」という定義が理解されず、イベント関係者としての業務を依頼されるなど、丁寧に複数回の説明を必要とする場合は、貸出しをしないことも双方にとって良い解決方法になることを学びました。これから施設貸出を検討される方には、企画書の細かいチェックの実施や借主との擦り合わせは、是非参考にさせていただきたいです。

実施に際しての注意

科博の施設貸出では、トラブル回避と円滑な運営のため、必ず借主に下見として来館いただき、貸し出す施設の取り扱い上の注意事項や搬出入経路などをご案内します。一方で複数回ご利用されるウェディング写真の会社などは省略可とするなど業務の効率化も図っています。貸出し当日の立ち合いは、常勤職員と非常勤職員で行うか、現場は非常勤職員に任せることもあります。その場合も必ず常勤職員も出勤するため、休日の貸出しは当番出勤日と合わせるなどして、平日の業務に差し支えないように調整を心がけています。

要望を多くいただく備品貸出しについては、貸出施設内に設置されている例えばプロジェクターなどは追加料金なしで使用可にしておりますが、それ以外の備品のレンタルはせず、必要なものは全て借主に持ち込んでもらっています。また、管理の手間などを考慮し、今後も追加の備品レンタルは予定していません。

利用時に科学博物館ならではの制約を設けており、生花などの有機物の持ち込み、水・火・煙・油の使用、当館に対してネガティブな印象を与えかねないもの、来館者に模倣されたくない行為は禁止しています。走るなどは真似されたくない行為のひとつですが、場合により科博の名前を伏せる形で許可することもあります。

想定される注意事項は、下見の際に口頭でお伝えするとともに、注意事項をまとめたものをメールでお渡しするようにしています。それでも伝わらない場合もあるので、承諾書発行の際のメール本文にも明記するなど複数回にわたりお知らせするようにしています。

貸出し件数の推移と兆候

途中コロナ禍があり件数は不規則ですが、平成31(令和元)年度から比較すると、平成31年度は49件、令和2年度は11件、令和3年度は20件、令和4年度は75件、そして今年度は既に平成31年度の年間実施数49件に達しています。月平均で比較しても昨年度上回る勢いで伸びており、特にウェディング写真撮影は希望件数が増加に比例して実施件数も増加しています。昨年度から今年度も継続的に問合せおよび実施件数が増加しています。貸出し希望の問合せ件数でみると、昨年度348件、今年度は既に178件(令和5年9月6日現在)と、このままの勢いならこちらも昨年度を上回る見込みです。

令和2年(2020年)からのコロナ禍の影響により、博物館の休館やイベントの中止などで、特に展示スペース貸出し調整が容易になったことが大きな要因となり、令和4年度には、それまで過去最大でも50件弱であった貸出し件数を大きく上

回る75件にまで増加したまま今年度も増加傾向が続いている状況です。

今後の対策など

増加し続ける利用希望ですが、コロナウィルス感染症の位置づけが5類に移行したこともあり、科博のイベントが続々と復活していることから昨年度までは希望があれば取れていた予約が逼迫するようになっていきます。どちらも喜ばしい事ではありますが、科博の業務を優先させた上で空きスペースと時間を広く一般にお貸出しするという施設貸出の前提のもと調整作業を進めています。

また、費用対効果を考慮し、今後はスチール撮影だけでなく、映像撮影などの対応を増やすべくスケジュール調整を検討しています。借主にも貸主である科博にも利益を創出し、科博を利用することで作品やイベントなどに付加価値をもらすような価値のあるものにしていければと考えています。

博物館資源の有効利用としての施設貸出は、博物館側が提供する価値だけでなく利用者からもたらされる新たな価値や人材面でも博物館をよく知る職員が行うため新たな事業を始めるよりもハードルが低く、より細部まで施設を把握できるメリットがあるので、検討されてはいかがでしょうか。

空間資源を活かす — “いつもの場所” から「場」を創る

九州大学総合研究博物館

教授 三島 美佐子・准教授 中西 哲也
准教授 伊藤 泰弘

1 はじめに

九州大学総合研究博物館（以下九大博物館）は、2000年に学内共同教育研究施設として設置された。当館設立以前にキャンパス移転が決定していたため、「博物館固有の建物」が建てられたり準備されることはなく、常に間借り状態で今に至る。現在も福岡市東区箱崎の旧キャンパス保存区域である「箱崎サテライト」に所在し、今後もそこで活動を続けていくことになっている。設立当初は収蔵スペースが全くなかったため、移転を契機に当館に移管・収集された資料は、移転完了した空室に暫定的に保管されてきた。

本稿では、キャンパス移転という特殊事情のもと、そこで生まれる空間を活用した博物館活動の経験における“現場知”を中心に紹介する。また、2023年に新たに整備された「伊都収蔵庫」を紹介しつつ、かつての経験や知見をふまえた利活用の抱負についても言及する。

2 旧工学部の機械実習工場での試み（2009-2015）

建て壊しのため2015年度に退去となるまでの約10年間、収蔵場所として、また、博物館催事の会場として大いに活躍したのが、当館で「第一分館」と称していた旧工学部知能機械実習工場だった。理学部から移管された鉱物鉱石標本と医学部から移管された動物骨格標本を仮保管するため、2006年に確保された。それぞれをコンクリート母屋の1階と2階に収

蔵展示として配置し、オープンキャンパスや施設一般公開などで公開するようになった。その母屋の両端に、スレート葺きの実習建屋が2つ連結しており、片方には、移転時にコレクション化した九大の歴史的什器（主に木製家具）や文学部から移管された考古資料・甕棺などを、仮置きするようになった。そしてもう一方の建屋が、歴史的作業機械などが残置された機械実習工場と铸造室で、2009年に整備しはじめ、「第一分館・倉庫」として展示や催事を催すようになった。

この活用に至る経緯や施設の詳細、実施した展示・催事については、すでにいくつか詳しく報告しているため、それらを参照されたい¹⁻⁴。そこでの実践をとおして得た気づきは、特色ある空間が、来場者の無意識に働きかける「場」である、ということだった。「場」が持つ力は、そこに来た人々を触発し、それを機に新たな作品が生まれたり、何かを表現したいという原動力を引き出す。そしてその表出として、新たな展示や催事が企画・実施される。さらにそこに訪れた来場者がまた触発され、さらに新たな催事を企画する……「第一分館・倉庫」はそんな好循環が生み出される場所だった。

3 常態から見出される「場」

上述してきた機械実習工場は、移管された当初は特に何かが感じられることもなく、その後もさしたる変化もなく、いつものとおりそこで放置されていた空間だった。著者の一人である三島がサイエンスカフェの会場探しのため、4年ぶりにこの実習工場に訪れたさい、突如として視野に入ってきたのだった。当時はゴミの山もあり、館内では“こんなところで何をするの？”という懐疑的な見方もあったが、不要物の廃棄や整頓・掃除で空間を整え実際に活用し始めてみると、大変好評を博した、という次第である。

そうしてみると、魅力的な「場」となりうるものは、実は“常態”の中にいつも存在しているのに、それに気づかないだけなのかもしれない。みなさんにもしばしばあったことと思う、何度も通って見慣れたはずの常設展示で、今まで気づかなかった出会いや発見が期せずしてあり、ちょっと心躍るという体験……あれに似ている。



2013年開催「活きる木製什器展「知春草生～春草ノ生ズルヲ知ル」」展示風景

4 経年も汚れも「味わい」にする

2018年にキャンパス移転が終わり、旧箱崎キャンパス跡地の一面に残された旧工学部本館建物を、我々九大博物館と大学文書館だけが間借りし続けることになった。使用が許可された室のうち、25～40平米の5室で、植物、昆虫、古生物、古人骨、工学の各収蔵展示を整備することになった。殆どの室で、当館が収集した九大の歴史の木製家具を用いることとし、雰囲気づくりにも注力した⁵。

そのうちの一つ「工学系資料開示室」は、鉱山模型など戦前の資源工学関連資料や、保健学科由来のX線管を展示している。この室の整備は、経年や汚れも「味わい」に転換した好事例だ。ここは壁面が布張りで木製の腰板もあり、昭和初期の建造物らしさがよく残っている室なのだが、おそらくは昭和の喫煙族の研究室だったのだろう、壁面は黄ばんでムラになり、一見、薄汚い感じだった。

筆者らの一人である中西は、天井部に配電レールとスポットライトを追加し、旧機械実習工場の床に敷き詰められていた木煉瓦（木製ブロック）を一部に敷き、木製家具を程よく配置することで、雰囲気のある開示室として仕上げた。一見汚いなあと感じていた壁面は、むしろ調和した色味と風合いになり、空間を引き立てている。



旧工学部本館内に整備された、「工学系資料開示室」

今後数年にわたり、この旧工学部本館は全館改修され、新たな展示室も整備されていく予定である。「工学系資料開示室」の事例は、「竣工当時に戻して真っ白に“綺麗に”仕上げる」だけではない改修の可能性を示してくれた。経年の風合いや新旧の改造を含めた内装・構造を、いかに「味わい」として転換しかつ建築史的な要素として、来場者の「博物館空間体験」や学びに繋げていくか。我々の今後の挑戦の一つである。

5 大型プレハブ収蔵庫の新設とその拡大利用

当館では、学外諸施設も複数借用し、資料を仮置きさせてもらっている。それらの借用期限が次々と迫る中、本学がいよいよ収蔵庫の建設を決断した。当初我々は、全面中二階・温湿度管理ありの設備を切望したが、さすがに費用が足りず、平屋の空調なし・換気扇ありのプレハブ倉庫となった。幸い、エアコン付きの200平米ほどの室が内包され、その天井上部は中二階として使用できることになった。“空調入りスペースを整備するからには、収蔵だけでなく、研究・教育に係る共同利用施設としての利用や、展示催事などの公開活動もすべし”（??）という命が下り、「伊都標本資料研究・教育ランチ」



学外借用収蔵庫から1週間かけ伊都収蔵庫に移設、再配置微調整中の歴史的工作機械類

と称されることになった。名称が長いので、我々は「収蔵庫」または「ランチ」と呼んでいる。主に歴史的什器類と工作機械、そして地学系資料、民族・考古系資料を収蔵する予定である。筆者らの一人である伊藤が、今年12月の中量棚導入に向け、整備主担当として奔走している。

9月上旬には、学外収蔵庫に置かせてもらっていた工作機械を移設し、収蔵展示にむけた再配置をしたところだ。元々工作機械を再配置する時がきた暁には、旧工場の設えを復元したかったので、床の木煉瓦や工具・器具類も回収保管していた。来年度にはそれらを再配置し、機械実習工場の雰囲気を再現したいと思っている。なお工作機械については、国立科学博物館はじめ、日本工業大学工業技術博物館、ヤマザキマザック工作機械博物館、熊本大学工学部研究資料館など、優れた収蔵展示・状態展示・動態展示が複数存在している。それら本格的な機械展示からすると、当館の収蔵展示は「初心者向けの導入的展示」となる予定である。より専門的で復元も本格的な上記他館への入り口になれば幸いだ。

この伊都収蔵庫については、本学からの命があってもなくても、第一分館・倉庫での経験や知見をもとに、特色ある展示・催事にも利用していくつもりだ。例えば、まずは歴史的木製家具コレクション展や、本学のSDGsがらみの研究者や糸島の工房などとコラボした“古モノフェス”などを検討している。また、旧工学部ゲッチンゲン風洞室木造建屋部材で組み上げられたカフェカウンターが「北九州・魚部」から返却されてきたので⁶、風洞に使われていた木製大型プロペラや、配電盤・工具・ギアなどの収蔵展示と合わせて、スチームパンクな雰囲気漂うカフェコーナー（交流ブース）として整えたい。

ただし、致命的な懸案事項は、なんといっても近年の暑さだ。おそらく空調のない倉庫部分での収蔵資料調査や教育・催事等の活動は、晩秋～早春、真夏以外の夜間など、季節限定となるだろう。

6 おわりに

ここまできて、“結局のところ「博物館の空間資源を活かす」と言っても、九大博物館は「大学キャンパス」という大括りの中で「空きニッチ」のように生じた空間を博物館的「場」として利用しただけの話なのでは？公立の博物館とは様相が随分異なるよね？”と思われたかもしれない。しかしこの“大括り”を、ある「行政区」やその「まち」として考えてみてはどうだろう。そこにはより多様で魅力的な空きニッチのような空間が数多くあり、そこが新たな「場」となりうる。そ

のような「場」を行政を介して潜在的に擁しているのが地方公立等博物館であり、そこに「拡張ミュージアム Extended Museum」としての可能性がある、と筆者らは感じている。



北九州の「バイオフィリア」で組み上げ・使用されていた
カフェカウンター

引用文献

1. 三島美佐子（2014）「観覧者の近くを刺激する展示空間の場の力—九州大学総合研究博物館の取り組み」、In 平井康之ほか『知覚を刺激するミュージアム 見て、触って、感じる博物館のつくりかた』：129-162.
2. 三島美佐子（2017）「これからの大学におけるアート・リソースの更なる可能性（予報）」、In 五十殿利治編『ユニヴァーシティ・アート・リソース研究Ⅱ』科学研究費補助金基盤研究（A）平成28年度報告書：153-158.
3. 三島美佐子（2018）「事例2 有形のなかの無形を伝える博物館体験」In 湯浅万紀子編著『博物館情報学シリーズ第5巻：ミュージアム・コミュニケーションと教育活動』：220-228.
4. 三島美佐子・岩永省三（2014）「九州大学総合研究博物館・第一分館の刷新的利活用（1）経緯」、九州大学総合研究博物館研究報告12：57-66.
5. 谷澤亜里・米元史織・岩永省三（2021）「九州大学総合研究博物館と箱崎キャンパス移転—旧工学部本館への資料集約と開示室の整備—」、九州大学総合研究博物館研究報告18：39-50.
6. 工藤雄太（2023）「バイオフィリア閉店」、ぎよぶる11号：168-171.

「儲からない博物館」の反論

小樽市総合博物館
学芸員（館長） 石川 直章

「博物館法」改正の示す未来

博物館法が今年4月、実に70年ぶり、戦後に制定されたからはじめて、大幅に改正された。今回の改正の背景を考えていくと、「博物館の本質」さらには「文化遺産の本質」が危機を迎えているのではないかと危惧している。私たちは次の世代に、文化遺産を伝えることができるのか、そのことを考えざるを得ない。

博物館法改正がもたらすもの

旧博物館法第19条には「公立博物館は、当該博物館を設置する地方公共団体の教育委員会の所管に属する。」という規定があった。ところが今回の改正で、この旧19条は削除され、首長部局で所管できるようになった。この変更は、実は博物館の本質にかかわるものでもある。

博物館法の第一条にある博物館の目的が、旧法では「社会教育法に基き、博物館の設置及び運営に関して必要な事項を定め」とあるのに対し、改正法では「社会教育法及び文化芸術基本法に基き」と変更され、それを受け、第3条の博物館が行うべき事業に「博物館が所在する地域における（略）文化の振興、文化観光の推進を図り、もって地域の活力の向上に寄与すること」が新設された。つまり、博物館に「文化観光の施設」という側面が与えられたのである。

観光施設としての側面が法により規定され、その運用に関しても、教育委員会ではなく、首長部局の所管とすることができるようになり、「教育」の要素が薄まっていく懸念がある。

実は今回の改正に先立ち、それまでの文部科学省生涯学習

の担当から文化庁に移転する改正があり、さらに「文化観光」の素材となる文化財についても、活用に力点を置く文化財保護法の改正が行われている。

一連の動きからは、文化財や博物館を観光資源として利用していこう、「儲からない博物館」や「稼げない文化財」は不要という意図があるのではと邪推してしまう。特に小樽の観光では文化財が大きな魅力となっており、さらに今後のまちづくりにおいても重要な要素となっていくことは間違いない。博物館に関わるものとして、その軸足が安易に観光優先にぶれて行かないように、心がけていかねばならない。

ひたすら続く「種まき」

明治後半から商業都市として栄えた小樽では、富裕層と呼ばれる人々も多く、多彩な趣味に勤しんでいた。なかでも写真のコレクションは明治30年代以降のものでおよそ5万点を



明治後期の明治後期の小樽 主人公たちの逃亡シーンの背景となった光景

こえる画像が残されている。そのため当館での資料利用申請は写真資料が最も多い。そして利用者の多くは、歴史研究を目指す人々ではなく、マスコミをはじめとする商業利用、もしくはその素材を求める人々である。当然のことながら、担当学芸員はこの写真資料についての調査・分析を行ってきた。

その成果が思わぬ形で反響を呼ぶことになる。例えば2015年にNHKで放映された「プラタモリ」の反響は大きかった。この番組は各地の学芸員が多く出演されており、その後の反響も当館と同じものがあつたのではないだろうか。入館者数はともかく、地域に存在する博物館の有用性を強くアピールすることができ、資料活用に関するご相談や依頼が増加していった。

もうひとつが2013年に来館されたコミック作家と編集者がもたらしたものであつた。「明治後期の小樽の雰囲気わかる資料が欲しい。」とのご相談で250枚近くの写真資料をコピーされていた。編集者に作品の内容をお聞きすると「金塊をめぐる西部劇のような活劇」というお答えで、当時は全く想像すらできなかった。その作品は2014年から「週刊ヤングジャンプ」（集英社発行）で連載され、2016年には「マンガ大賞」を受賞する『ゴールデンカムイ』である。

ご存知の方も多いであろうが、この作品の舞台は主に北海道、特に冒頭部分の小樽とその近郊が舞台となっている。この前後、コミックを取り上げた特別展、企画展が全国で行われ、札幌芸術の森美術館で「進撃の巨人」展が、佐賀県立美術館では「キングダム」展が行われ、いずれもコミックを「美術作品」としての展示をすることが軸になっている。

そこで、美術館の行う「原画」展とは視点を変え、地域の博物館として作品の背景となっている小樽の歴史を紹介する「『ゴールデンカムイ』の中の小樽」の開催を企画した。もちろんデジタル原画や画像の使用許可を集英社のご厚意でいただき、これらの展示が柱となっていることは間違いないのであるが、「博物館」が行う企画展を目指した。

そもそも、この企画展を実施した理由は、この作品が明治後半の小樽の雰囲気をよく表現しているからであつた。日露戦争の旅順攻略の際には、小樽に拠点を置く海運会社の商船が徴用され、戦争後、これらの海運会社には莫大な補償金が支払われ、樺太航路の活況とともに、小樽の経済はピークに向かっていく。

一方で、その経済的活況を支える、多くの労働者が必要となり、全国各地から仕事を求める人々が流入してきていた。「小樽に行けば何とかかな」と、多くの人々が押し掛ける、一種のゴールドラッシュのような光景が見られた。

そのようなエネルギーではあるが、不安定な社会を抱える小樽の雰囲気が、この『ゴールデンカムイ』の中で描かれており、作品を通じて、明治末から大正にかけての小樽を紹介したい、と考えたからである。当館の展示はこの作品を前面に出した全国初のもとなり、多くの注目をあびた。集英社にとっても貴重な作品を地域の小さな博物館で紹介することに不安を感じられたのか、異例ともいべき対応をいただき、ヤングジャンプ本誌に当館の展示予告を掲載していただいた。その効果もあり、入館者数は増加し、それ以上に、この作品のファンたちに小樽市総合博物館が「聖地」巡礼の場として認識された。『ゴールデンカムイ』はその後、人気を博し、終盤に近付いた2019年には、大英博物館で行われた「マ

ンガ展」ではメインビジュアルとして使われることになる。作品終盤で、再び当館の収蔵資料である蒸気機関車「しづか号」が登場すると、この作品が博物館にいままで来なかった層、とくに鉄道中心の展示をしている当館本館にはあまり来られなかった層の来館が明らかに増加した。とくに彼女（女性が多かった、もしくは目立った）たちの機関車を撮るアングルが明らかに作品中に登場する画像と同じものを探していたのである。

本来業務として続けてきた、資料などの情報提供をしてきたことが結果として集客、博物館の知名度のアップにつながつたのである。

博物館を利用するとは

筆者が大学などで博物館学芸員を目指す学生たちに必ず勧める文献がある。寺西貞弘氏（和歌山市立博物館：当時）が著した『和歌山ラーメンの源流』（和歌山市立博物館研究紀要26（2011））である。古代史の研究者である寺西氏が戦後のラーメンの歴史をまとめた理由を以下のように書かれている。

収蔵資料にラーメン鉢一つだに無い和歌山市立博物館に、「和歌山ラーメンの特徴は何ですか」、「和歌山ラーメンの起源は何時ですか」などの質問が、数多く寄せられる。わからないなりに、真摯に回答の準備をしなくてはならない。それが公立博物館の学芸員のあるべき姿である。

地方博物館にとって、存続を含めかなり厳しい社会環境になっている昨今、博物館の生存戦略はやはり「博物館であること」である。寺西氏の指摘は正鵠を射ており、地域にとって「困った時の博物館」となることが理想なのではないだろうか。「文化観光」のために観光にシフトするのではなく、観光を含めた地域の産業やムーブメントに「資料提供」「情報提供」をおこない下支えをすることが、これから求められることではないだろうか。

その実践として、当館に隣接するセレクトショップが行っている、当館の資料を活用した商品開発に協力している。いわばミュージアムショップの拡散である。博物館のスタッフとは全く異なる発想で、資料の魅力を発見し、その魅力をうまく伝えている。資料提供だけではなく、解説文の校正なども行って、博物館のネットワークを広げようと試みている。もちろん、今後同様な提案があれば、できる限り協力をしていきたい。そのためには資料収集、調査・分析という基礎部分の徹底をしなければいけない。それが、地域の博物館のめざす方向である。



木骨石造の小樽市総合博物館（運河館）を模した菓子容器

コラボレーションで生まれる化学変化 知的好奇心へと働きかけるミュージアムグッズの開発

株式会社フェリシモ
ミュージアム部 内村 彰

はじめに～フェリシモ「ミュージアム部™」とは～

私が代表をしている「ミュージアム部」というコミュニティは、株式会社フェリシモの部活制度「フェリシモ部活」のひとつです。

ミュージアムが大好きなメンバーが集まり、ミュージアムをもっと楽しむための商品開発や、そこで体験したことをSNSで日々発信しています。

ここまで読むとフェリシモという会社はミュージアムグッズを作ったりミュージアムショップを運営する会社なのかと思われるかもしれませんが、実はファッションや雑貨など自社企画商品を中心に、カタログやウェブなどの独自メディアで生活者に販売するダイレクトマーケティングの会社です。

そこで私は商品プランナーとして働きながら、社内のあるユニークな取り組み「フェリシモ部活」の制度を利用して、自分が興味を持った物やそのジャンルのグッズを作り続けています。

「フェリシモ部活制度」はもともと「社内交流の一環」ではじまった取り組みです。共通の趣味や好きなものを持つ社員同士が時間を決めて集まり、仕事以外での交友関係を広げ、互いの個性や興味・関心を活かすことで自発性を促して仕事にもプラスの効果があればと考えて発足されたものでしたが、そういう場で意見交換をするうちに自然と「こういった商品をつくりたい」「この課題を解決したい」という流れになることが多く、事業化して活動する部活も少なくありません。

ミュージアム部もそのような「フェリシモ部活制度」を使って声掛けをした結果、日頃からミュージアムでの時間を楽しんでいるフェリシモ社員が集まり、2019年から現在まで活動を続けています。



企画会議の様子

「ミュージアム部」の活動

ミュージアム部の活動でメインとなるのは商品開発です。ミュージアムで手軽に買えるポストカードを外側のポケットにセットして楽しめる「マイミュージアムポーチ」。買ってから使っていないクリアファイルをセットして、オシャレに持ち歩くことができる「マイミュージアムトートバッグ」。鑑賞の妨げになるヒール音などの靴音も軽減しながら、おしゃれが楽しめるTストラップシューズ。このようなミュージアム好きならではの着眼点で開発した商品は、多くのメディアにも取り上げていただいています。

また、全国のミュージアムとコラボレーションして企画することも、ミュージアム部を象徴する活動のひとつです。多くは公式サイトに設置しているお問い合わせフォームへ「一緒にグッズを作ってほしい」とミュージアムから問い合わせが入ることからスタートしますが、メンバー自身がやりたい特定のジャンルがあり、希望しているミュージアムと一緒にモノづくりをしてみたいと考えた際は、こちらからお声かけすることもあります。

コラボレーショングッズの開発では、ミュージアムの持つ専門性と、私たちの持つ生活者の視点を掛けあわせることで、より魅力的な商品を生み出すことが可能になります。

コラボレーションの流れ 1.「展示物への理解を深める」

コラボレーション企画はミュージアムの方とお話しするところから始まります。遠方ですぐにお会いすることができない場合は、オンライン会議を利用することができるので、昔に比べると今は距離が問題ではなくなりました。それでもタイミングを見つけてメンバーは必ずミュージアムへ赴き、直接お話をさせていただいています。

過去の事例を思い返してみますと、ミュージアムに伺った際、学芸員の方に作品や展示物の解説を直接していただける機会があると、ご提案する内容のクオリティも高くなる傾向があります。

それによってインパクトある表現になるとか、オシャレなデザインになるということよりも、制作するミュージアム部のメンバーに展示物に対するリテラシーのようなものが備わり、その結果「語るべきポイント」が増えるといったほうが正しいかもしれません。

モチーフとなる展示物をただの資料として見てしまうと、フォルムなどの表層的な部分だけに目がいきがちです。しかしモチーフ全体を深く理解することで、グッズ化した際にそのアイテムにした意図や、選んだ素材の必然性、販売時期にいたるまで、さまざまな「理由」がしっかりと結びつきます。私たちは商品企画をする際、この部分を忘れないよう意識しながらモノづくりに取り組んでいます。

コラボレーションの流れ 2.「企画アイデアのご提案」

展示物について深く理解ができた後は一定期間お時間をいただき、後日ミュージアム部から「企画提案書」を提出のうえプレゼンテーションさせていただきます。



2021年当時の伊丹市昆虫館の館長、奥山清市さんにチョウの生態についてお聞きしました。



後日提案した企画書の一部

チョウの生態を表現できるエコバッグ&ポーチとして提案

企画提案書にはグッズをイメージできるビジュアル（写真やイラストで表現）や予想される上代、ミニマムロットなどミュージアムでの運用を検討する際に必要となる具体的な情報が載っています。

プレゼンテーションの時間では、双方ともざっくばらんに意見を交わしています。それぞれの知識だけでは思いつかなかったようなアイデアや、知らなかった情報も出し合うことで新たな可能性が生まれる時間です。

このタイミングでグッズ製作に必要な高解像度の写真や、学術的な資料等をお借りすることが多いです。場合によっては撮影をさせていただき使用することもあります。

もしここで、コラボグッズを使ってどのように集客するか、SNSでの発信をするかなど話すことができればグッズに話題になるポイントを盛り込むことが可能になります。

コラボレーションの流れ 3.「試作サンプルの確認」

待ちに待ったサンプルアップです。手探りから始まり、双方の想いを込めて生まれたサンプルを手取る瞬間は、感動もひとしおです。そしてこの第一回目のサンプルチェックで改善点を残さず見つけることがとても重要になります。

ミュージアムや、グッズ製造工場も限られた時間の中での業務になりますので、チェック回数を決めて精度の高い修正を行う事が大切です。

また、サンプルの試作から気づいた点もこのタイミングで共有させていただきます。構造上無理があった、生産背景でのコストアップがあり別の生地で作る可能性がある、などより現実的なお話をさせていただくフェーズです。



完成したサンプルをチェックしていただいている様子

コラボレーションの流れ 4.「メディア掲載表現の確認」

1回目のサンプルチェックを終えて数週間すると、最終段階に近いサンプルが上がってきます。改めてグッズをチェックいただくことになるのですが、このタイミングでは販売時の記載表現についてのチェックもお願いすることがあります。それらは商品に同梱する情報カードであったり、SNS投稿の記事、コラボレーションとしてミュージアム部が掲載するカ

タログであったりさまざまです。

商品を作るだけではお客さまに知っていただくことはできません。カタログ、ウェブ、グッズ同梱の情報カードなどさまざまな手法を使い、多角的に情報発信していきます。それらにはミュージアムの情報や、モチーフとなった展示物の紹介も必ず掲載していますので、ミュージアムの担当者の方には公式コメントとして文面チェックをいただいています。

コラボレーションの流れ 5.「ニュースリリースの発信」

グッズ本体、同梱する情報カードが完成するとあとは納品を待つばかりですが、コラボレーションの場合、双方でグッズ新発売のニュースリリースを発信することが多いです。実施するタイミングや掲載する写真などの共有をさせていただきます。このやりとりは2回目のサンプルアップを待つタイミングから納品までの間に詰めることが多いです。

ここまでくるとあと少しですが、最大限の効果がでるように情報共有しながら、綿密にリリースのタイミングを決めていきます。

最近の事例としては、新潟県・十日町市にある「十日町市博物館」さまとコラボレーションして縄文土器グッズを企画・発売した際はそのあたりの準備がとてもうまくいきました。

ミュージアムに行って購入するお客さまがいち早く手に入れることができるように、記者会見やニュースリリースを打つタイミングからショップでの発売タイミングなども綿密に調整しました。

そのおかげで「十日町市博物館」さまの情報発信を見たお客さまからの問い合わせもたくさんあったそうです。グッズのニュースを知り、県外から買いに訪れる方もいらっしたようすし、地元新聞社さまも記事にしてくださいました。

ミュージアムをもっと楽しむために

以上の様にミュージアム部で一緒させていただく場合、グッズを作って納品して終わりではなく、「どうやってそのグッズをお客さまに知ってもらえるか、また発売後も育てていけるか。」を考えてさまざまな施策を行います。

私たちは、ミュージアムグッズを、生活者の方の知的好奇心へと働きかける役割のものだと思っています。グッズを通じて「面白い！もっと見たい！もっと知りたい！」そう思っただき、ミュージアムへとつなぐことを目指し、日々活動しています。

ここを動かす空間をつくりあげるために。

調査・企画、デザイン・設計、制作・施工、運営

Tanseisha

空間創造のプロフェッショナル 株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70 品川シーズンテラス19F
TEL|03-6455-8100(代表) URL|www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・新潟・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇・上海



■ 新設館

インド北西部ヒマラヤ山脈に、最初の科学館が開館 (2022年5月)

2022年5月22日に、インドは、ヒマラヤ山脈の西側に位置するヒマチャル・プラデーシュ州のパールampur (都市圏人口：4,800人) に、パールampur科学館が開館した。インドにとって、26番目の科学館の同館は、コルカタに本部を置く、国立科学博物館評議会 (NCSM) によって設立され、同評議会のインド北部本部が設置されているデリー国立科学館によって運営されている。

2,500㎡の展示施設をもつパールampur科学館では、「人間が制御できない地球」が、常設展の中核テーマになっており、ユーラシアプレートとインド・オーストラリアプレートの衝突によって形成されたヒマラヤ山脈で多発する地震を中心に、気候変動による鉄砲水、氷河の融解、雪崩や森林火災の発生のメカニズムと、被害拡大への対策を紹介している。総事業費：120万米ドル (相当)。

Palampur Science Centre. Palampur, Himachal Pradesh State.

担当学芸員：Ram Swaroop.

<https://ncsm.gov.in/activities/inauguration-of-palampur-science-centre-palampur-himachal-pradesh>

<https://nsdc.gov.in/sub-regional-science-centr-palampur/>

<https://www.youtube.com/watch?v=PNDaqOTybok>

エチオピアの首都アディスアベバに、アフリカ大陸最大の科学系博物館が開館 (2022年10月)

2022年10月22日に、エチオピアの首都アディスアベバ (都市圏人口：546万人) の中心部に、中国からの全面的な資金援助を受けて、アフリカ大陸で最大の科学系博物館「エチオピア科学・芸術博物館」が開館した。約15,000㎡の展示施設では、エチオピアの経済的発展のもととなる先端技術の紹介が中心となっている。総事業費：約1,980万米ドル (相当)。

いっぽうエチオピア科学・芸術博物館の開館に先だって、2014年9月にアディスアベバ科学技術大学のキャンパスに、科学館「エチオピア科学博物館」が開館した。イスラエルからの資金援助とイスラエル国立科学技術宇宙博物館 (同国ハイファ市) の協力を受けて整備された同館では、基礎科学の普及に力を置いており、物理、電気と磁力、光学とエンジニアリングの展示が紹介されている。なおアディスアベバ大学には、1964年設立の自然史博物館があり、理学部動物学教室の管轄下にある。館長を数年兼務した動物学教室のベザウォーク・アフエ

ウォーク・ボガレ准教授 (動物生態学・行動学) は、日本留学の経験があり、東京農工大学で鳥類行動生物学の博士号を取得し、宇都宮大学の杉田昭栄・名誉教授 (神経解剖学) の指導の下、ハシブトガラスが人間の顔で性別を見分ける認知能力に関する研究をされていた。

Ethiopian Museum of Art and Science. Addis Ababa.

<https://www.ethiopiansciencemuseum.et/>

<https://youtu.be/Q51jCWzKVYU>

https://en.wikipedia.org/wiki/Ethiopia_Museum_of_Art_and_Science

<https://borkena.com/2022/10/04/ethiopias-science-and-art-museum-inaugurated/>

<https://ethiopianmonitor.com/2022/10/04/pm-abiy-inaugurates-addis-ababas-first-science-museum/>

<https://www.youtube.com/watch?v=hMxp5kGjmeE>

<https://www.ashinaga.org/en/about-us/kenjin-tatsujin/bezawork-afework-bogale/>

米ピッツバーグに、宇宙探査の博物館が開館 (2022年10月)

2022年10月22日に、ペンシルバニア州ピッツバーグ (都市圏人口：237万人) に、同州にとって初めての宇宙関連の博物館「ムーンショット博物館」が開館した。同館は、宇宙探査ロボットの開発をすすめているアストロボティック・テクノロジー社 (CEO：ジョン・ソートン) によって設立され、同社の本社の敷地内に設けられている (運営：アストロボティック財団)。同館では、アストロボティック・テクノロジー社が手がけている、無人月面着陸機や無人月面探査車の実験機が展示され、月面探査におけるロボット技術の利用の可能性を紹介している。

Moonshot Museum. Pittsburgh, Pennsylvania.

<https://moonshotmuseum.org/>

<https://www.bizjournals.com/pittsburgh/inno/stories/news/2022/08/24/moonshot-museum-sets-opening-datd.html#:~:text=Come%20Oct.,will%20open%20to%20tth%20public.>

■ 企画展・特別展

ジェーン・グドール展、北米を巡回中

2022年10月7日に、米ミズーリー州セントルイス (都市圏人口：281万人) のセントルイス科学館で、世界的な霊長類研究者のジェーン・グドール博士の業績を紹介した特別展が開幕した。

同展では、正規の大学教育を受けていないにも関わら

ず、ケニアでの人類学者ルイス・リーキーとの出会いをスタートに、長くアフリカでのフィールドワークを通じて、霊長類研究者になっていくグドール博士の生い立ちが紹介された。また野生下でチンパンジーの行動や社会性を長期にわたって観察し、人間とチンパンジーの共通点や相違点を明らかにした業績なども紹介された。会期：2023年4月9日まで。

同展は、ワシントンDCに本部を置く、ナショナル・ジオグラフィック協会が企画制作した巡回展であり、2019年11月に同協会の博物館「ナショナル・ジオグラフィック博物館」で立ち上がり、その後フィールド自然史博物館（シカゴ）、ロサンゼルス郡立自然史博物館、ペロット自然と科学の博物館（ダラス）で、開催された。Becoming Jane: The Evolution of Dr. Jane Goodall. Saint Louis Science Center. St. Louis, Missouri.
<https://www.slsc.org/becoming-jane/>
https://www.slsc.org/wp-content/uploads/2022/09/BecomingJane_Ed_Toolkit_Revised-2022.05.10.pdf
<https://exhibitions.nationalgeographic.org/exhibition/becoming-jane-traveling>
<https://syta.org/becoming-jane/>
https://www.facebook.com/watch/live/?ref=watch_permalink&v=141392024676219

米テキサス州の航空博物館で、米軍兵員貨物輸送グライダー展を開催

2023年7月1日に、テキサス州ラボック（都市圏人口：33万人）の旧サウスプレーンズ米陸軍飛行隊基地にある航空博物館「サイレント・ウィングズ博物館」で、第二次世界大戦で活躍した米陸軍の兵員貨物輸送グライダーを紹介した企画展が開幕した。「約束から生産まで(From Promise to Production)」と題した同展では、戦時中に兵員と貨物を戦場まで運ぶ目的で、米陸軍の命令を受けて、低予算で大量生産を条件に、生産された兵員貨物輸送グライダー「ワコー CG-4A」（ワコー・エアクラフト社設計・製造）の実機が展示され、冷蔵庫をはじめ、ピアノ、さらに離乳食を製造する企業がそれぞれの生産設備を使って、グライダー生産に関わった裏話が紹介されている。13,903機が製造された同機は、二人の正副パイロットによって操縦され、最大13名の完全武装兵士、あるいはジープまたは75ミリ榴弾砲を、イギリスの英空軍基地から、欧州戦線の戦場に輸送した。スペック：巡航速度 時速117キロ、最大速度 時速240キロ、重量3,401キロ、全長14.83メートル、幅25.5メートル、構造 木金混合骨組みに羽布張り。

サイレント・ウィングズ博物館（1984年10月開館）は、第二次世界大戦で活躍したアメリカにおけるグライダーの歴史を紹介した、グライダー専門の航空博物館。同館では、航空機格納庫で、毎年テーマを変えて、ワコー

CG-4Aの企画展を開催している。企画展「約束から生産まで」の会期：2024年4月30日まで。

担当学芸員：Sharon McCullar.

From Promise to Production.

Silent Wings Museum. Lubbock, Texas.

<https://ci.lubbock.tx.us/departments/silent-wings-museum/about-us>

<https://www.kcbd.com/2023/08/11/silent-wings-museum-honoring-spirit-45-day-with-new-exhibit/>



サイレント・ウィングズ博物館所蔵の兵員貨物輸送グライダー「ワコー CG-4A」
Courtesy of Silent Wings Museum.

■ 常設展

英ロンドン科学博物館に、常設展「エンジニア列伝」がオープン（2023年6月）

2012年に、エリザベス女王の即位60周年を記念して、卓越した独創性でエンジニアリングの発展に貢献したエンジニアに、賞金100万ポンドを授与するエリザベス女王エンジニアリング賞が制定され、隔年に優れたエンジニアが選ばれてきた。

2023年6月23日に、ロンドン科学博物館でオープンした常設展「エンジニア列伝 (Engineers)」では、歴代のエリザベス女王エンジニアリング賞の受賞者の業績を紹介している。同展では、太陽光エネルギーの開発に貢献した、マーティン・グリーン氏とそのグループの業績が紹介されている（2023年度受賞）。また日本人の受賞者も含まれている：デジタルイメージセンサーの開発を手がけた寺西信一氏とそのグループ（2017年度受賞）、青色LED照明を発明した赤崎勇氏と中村修二氏のグループ（2021年度受賞）、世界最強とされる「ネオジム磁石」を発明した佐川真人氏（2022年度受賞）。

Engineers.

Science Museum, London.

<https://www.sciencemuseum.org.uk/about-us/press-office/engineers-gallery-open-science-museum-june-2023>

<https://www.sciencemuseum.org.uk/see-and-do/engineers>

11月12月の特別展等

開催館	展覧会名	開催期間
釧路市こども遊学館	青少年のための科学の祭典 釧路退会 サイエンス屋台村	11月3日
	クリスマス・スペシャル	12月16日～12月17日
岩手県立博物館	テーマ展「早池峰山の花と森」	9月23日～12月3日
	巡回展「ポケモン化石博物館」	12月19日～2024年3月3日
郡山市ふれあい科学館	ホワイエ企画展「プラネタリウム100周年記念 プラネタリウムのあゆみ」	9月2日～11月26日
	ホワイエ企画展「宇宙の美しい天体たち」	12月2日～2024年1月8日
	スペースパーク企画展「色と光のふしぎ発見!」	12月2日～2024年1月8日
つくばエキスポセンター	企画展「すごいぞ! 歯車!!くるくる回っていっぱいお仕事」	11月18日～2024年1月28日
産業技術総合研究所 地質標本館	企画展「生痕化石～地層に刻まれた生命の痕跡～」	10月3日～12月24日
ミュージアムパーク茨城県 自然博物館	第88回企画展「地衣類－木を、岩を、地面を彩る身近な生きもの－」	10月7日～2024年1月21日
日立シビックセンター科学館 サクリエ	近代プラネタリウム誕生100年企画 プラネタリウムの歴史展	9月16日～11月5日
	ミニ企画展示「土からわかる防災のおはなし」	10月7日～2024年1月21日
	科学館冬の特別イベント 新世界『透明標本』展	11月18日～2024年1月8日
栃木県立博物館	テーマ展「栃木県版レッドリストが新しくなりました!～絶滅のおそれがある生きものと地形・地質～」	4月15日～2024年3月24日
	テーマ展「ぼくらの自由研究～川の地形と石～」	7月15日～2024年3月3日
	企画展「近代皇室と栃木～とちぎ御用邸ものがたり～」	10月7日～11月26日
群馬県立自然史博物館	第68回企画展「ポケモン化石博物館」	7月15日～12月3日
川口市立科学館	せっかく来たから「さっかく」見ていく?～錯覚の科学を楽しもう!～	12月9日～2024年2月12日
千葉県立中央博物館	手のひらのメディアー吉澤貞一マッチラベルコレクションー	10月3日～12月24日
科学技術館	蚊のひみつを知ろう!	11月1日～11月3日
	東京パズルデー2023 in 科学技術館	11月11日～11月12日
港区立みなと科学館	2023年秋の企画展「港と船」	10月12日～11月12日
国立科学博物館	関東大震災100年企画展「震災からのあゆみー未来へつなげる科学技術ー」	9月1日～11月26日
	特別展「和食ー日本の自然、人々の知恵ー」	10月28日～2024年2月25日
たばこと塩の博物館	芥川龍之介がみた江戸・東京	9月16日～11月12日
	見て楽し遊んで楽し 江戸のおもちゃ絵 Part2	12月2日～2024年1月28日
郵政博物館	企画展「お宝みせます! 郵政博物館の重要文化財展」	9月16日～12月3日
	企画展「辰年年賀状展」	12月7日～2024年1月8日
サンシャイン水族館	もうどく展 ReMix	3月17日～11月5日
多摩六都科学館	秋の企画展「プラネタリウム100年～歴史としくみ～」	10月7日～11月5日
	冬の特別イベント「ロクトロボットパーク」	12月23日～2024年1月8日
神奈川県立生命の星・ 地球博物館	2023年度特別展「かながわご当地菌類展」	7月15日～11月5日
平塚市博物館	天象儀100年の軌跡	10月21日～2024年1月8日
富山県 立山カルデラ砂防博物館	特別展「写真でみる立山の地形」	10月3日～12月17日
岐阜県博物館	特別展「出かけよう! 0→3,000mの旅ー植物が彩る物語ー」	9月15日～12月3日
世界淡水魚園水族館 アクア・トトぎふ	企画展『きんトト今昔物語ー時代を彩る金魚たちー』	7月14日～12月10日

※施設の一部を閉鎖している館園や、入館に際し予約を必要とする館園がございます。各館園のホームページをご確認ください。

開 催 館	展 覧 会 名	開 催 期 間
中津川市鉱物博物館	第29回企画展 博物学の黎明と鉱物－本草綱目・雲根志の石	10月14日～12月24日
ふじのくに地球環境史ミュージアム	イネ・米・田んぼ	11月11日～2024年3月24日
静岡科学館 る・く・る	企画展「ほくらの世界を紡ぐ糸」	12月23日～2024年2月18日
名古屋市科学館	特別展「化石ハンター展」	11月11日～2024年2月18日
京都鉄道博物館	特別企画「銀河鉄道999展」	12月9日～2024年2月4日
大阪市立科学館	企画展「プラネタリウムの歴史と大阪」	8月30日～11月5日
高槻市立自然博物館 (あくあびあ芥川)	鳥の羽根のふしぎ	10月21日～2024年1月21日
きしわだ自然資料館	令和5年度 きしわだ自然資料館特別展 動物のあしー足元から知る生き物のくらし	10月28日～2024年1月8日
阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター	関東大震災100年。100年前と今。都市における大災害に備えよう！	9月1日～2024年1月28日
兵庫県立人と自然の博物館	妖怪と自然の博物展	7月1日～2024年1月8日
	但馬牛展	10月28日～2024年1月8日
	シモバシラ展	11月28日～2024年1月8日
明石市立天文科学館	プラネタリウム展	10月21日～12月3日
	2024年全国カレンダー展	12月9日～2024年1月28日
鳥取県立博物館	企画展「勾玉の世界」	10月7日～11月12日
	美術部門テーマ展示 シリーズ・美術をめぐる場をつくる5 「赤ちゃんたちのためのアート鑑賞パラダイス」	10月15日～11月12日
	企画展 ミュージアムとの創造的対話04「ラーニング/シェアリングー共有から未来は開くか？」	11月26日～12月28日
島根県立三瓶自然館	リト@葉っぱ切り絵展～葉っぱの小旅行 in 島根～	10月28日～11月26日
	冬の企画展 第44回 SSP 展 自然を楽しむ科学の眼	12月23日～2024年1月28日
倉敷市立自然史博物館	畠田和一貝類コレクション展9 畠田和一が採集していた岡山県の絶滅危惧種5	10月14日～2024年3月24日
	特別陳列「第31回しぜんしくらしき賞作品展」	10月21日～12月6日
	まちかど博物館ほか標本展示閲覧会	12月15日～2024年1月16日
広島市健康づくりセンター 健康科学館	みんな集まれ！わくわく☆あそびの世界へ	7月22日～11月5日
	ウェル噛ム！お口の健康づくり	11月11日～2024年3月10日
広島市交通科学館	秋季企画展 「爽快！乗り物アクティビティ」	10月14日～12月3日
防府市青少年科学館	企画展「はかるがわかる展～“計る”と“測る”と“量る”～」	10月28日～2024年1月14日
山口県立山口博物館	サイエンスやまぐち2023	10月27日～11月12日
	企画展 手鑑「多々良の麻佐古」	11月23日～2024年2月4日
北九州市立自然史・歴史博物館	企画展「小笠原騒動－小倉藩小笠原家と狐－」	9月9日～12月10日
	秋の特別展「なつかしい暮らしと道具展」	10月14日～12月3日
福岡市科学館	動画クリエイター展	10月20日～2024年1月8日
佐賀県立宇宙科学館	秋冬の企画展「宇宙を見上げて」	10月21日～2024年1月8日
熊本県博物館 ネットワークセンター	バックヤードに眠る日本の鉱物	10月11日～12月10日
宮崎県総合博物館	黒潮はくぶつかん～日向灘から琉球列島の生きものと海の恵み～	10月14日～11月26日
出水市ツル博物館 クレインパークいずみ	企画展「台湾の野鳥固有種 写真展」	11月8日～12月10日

※次号(1月号)に掲載の1月2月の特別展情報は11月24日(金)までにお寄せください。

リニューアル情報

※次号(1月号)に掲載のリニューアル情報は11月24日(金)までにお寄せください。

福井県立恐竜博物館

[更新箇所] 本館改修・更新、新館増築

[更新内容] 福井県立恐竜博物館は2024年春の北陸新幹線福井・敦賀延伸を見据え、大規模リニューアル(本館改修、新館増築)を行い、「恐竜のリアルをオールシーズンで体感・体験できる博物館」をコンセプトに生まれ変わりました。

【主なリニューアル内容】

新館(増築棟)

(1) シンボルモニュメント「恐竜の塔」

福井で発見された実物大の恐竜5体と鳥類1体をあしらった高さ約13mのモニュメント

(2) 3面ダイノシアター(特別展示室)

高さ9m×幅16m×3面の大型スクリーンに実物大の恐竜が動き回る姿を臨場感ある映像で再現(特別展開催期間は除く)

(3) 化石研究体験

① 化石クリーニング(通年)

専用ツールで恐竜の歯のレプリカを取り出す

② CT化石観察(通年)

CTスキャンデータで化石の内部などを観察し、化石を壊さずに内部を調べる

③ T.rex頭骨復元(4月下旬～11月上旬)

実物大の頭骨を組み立て、骨のしくみと復元のプロセスを学ぶ

④ 化石発掘プラス(11月中旬～4月中旬)

化石を見つけ、見分ける目を養う

(4) 見える収蔵庫

通常見ることができない収蔵庫の中の様子を窓ガラス越しに見ることができる

本館(既存棟)

(1) 常設展示室

① ティラノサウルスロボットの周囲の壁を撤去して常設展示室内を見渡せるよう視界を広くし、左右にタルボサウルスとサウロロフスの全身骨格を配置

TOKYO SCIENCE CO., LTD.

ミュージアム・ショップ向/教育用地学標本



since 1974

地学標本/化石・鉱物・岩石
古生物/レプリカ・復元模型
恐竜復元モデル

◆常設ショールーム: 紀伊國屋書店・新宿本店1F TEL.03(3354)0131(代表)◆

Fossils, Minerals & Rocks
株式会社 東京サイエンス
〒151-0051 渋谷区千駄ヶ谷5-8-2 イワオ・アネックスビル
TEL.03-3350-6725 FAX.03-3350-6745
http://www.tokyo-science.co.jp
E-mail: info@tokyo-science.co.jp

Practical Specimens for Study of Earth Science

KONICA MINOLTA Giving Shape to Ideas

DYNAVISION-LED
LED DOME SYSTEM

革新的なテクノロジーを結集した
新しいLED映像システムで
リアルな臨場感と美しい映像体験を



コニカミノルタプラネタリウム 製品 検索 画像: コニカミノルタプラネタリウム (満天) NAGOYA

- ② 恐竜の全身骨格を44体から50体を増やし、その他の展示も最新の恐竜研究を反映させて更新
- ③ 「ブラキロフォサウルス」の実物ミイラ化石（通称「レオナルド」）の展示【2033年までの期間限定】
- ④ 「生命の歴史」ゾーンの「中生代の海の爬虫類」コーナーに、海中風景画とともに全長約13mのティロサウルスを設置

(2) ダイノライブラリー（図書室）、ミュージアムショップ、レストランの拡充

(3) キッズスペースの新設

〔延床面積〕 約23,600㎡（本館16,400㎡、新館7,200㎡）

〔敷地面積〕 約38,000㎡

〔公開日〕 令和5年7月14日

〔準備工事〕 契約日 令和2年10月21日着工

〔建築工事〕 契約日 令和3年10月6日着工

〔設計監理〕 株式会社 黒川紀章建築都市設計事務所

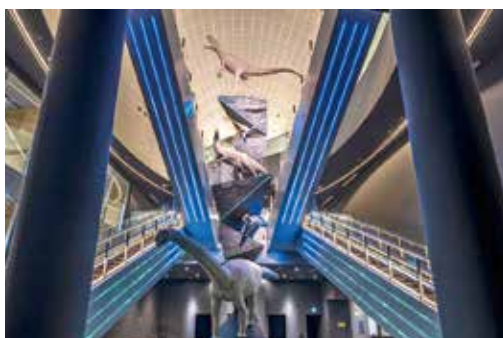
〔総工費〕 約94億円



福井県立恐竜博物館外観（鳥瞰図）



常設展示室1階「恐竜の世界」ゾーン



シンボルモニュメント「恐竜の塔」



3面ダイノシアター（特別展示室）※特別展開催時を除く

Panasonic
CONNECT

B | NOMURA
GROUP

世界に、歓びと感動を



株式会社 **乃村工藝社**

本社 東京都港区台場2-3-4 TEL: 03-5962-1171 (代表)

多様なサイエンスショーで伝える科学や浜松



浜松科学館HP
<https://www.mirai-ra.jp/>

浜松科学館では1日5回、中央の大きなステージでサイエンスショーを開催しています。定番の空気砲や液体窒素を使った実験の他、徳川家康や青色LEDなど浜松にゆかりのある事物をテーマにしたショーも行っているのが特徴です。動画などでは味わえない、目の前で起こる科学現象の迫力や面白さを体感できます。テーマや内容はその日の担当者によって異なるので、いつ来ても何度観ても楽しめます。浜松にお越しの際はぜひご覧ください。



次回執筆者は、神奈川県立生命の星・地球博物館 学芸員 西澤 文勝さんです。

第31回研究発表大会

事例発表者の募集について

令和6年2月22日(木)に滋賀県立琵琶湖博物館にて開催する第31回研究発表大会での事例発表者を募集します。

今回のテーマは「コミュニティとともに活動する博物館」です。活発な情報交換の場となるよう、自館の取り組みや課題など是非ご紹介ください。

応募は口頭発表、ポスター発表とも11月7日(火)までに、事務局宛メールかFAXでお申込みください。

詳しくは、10月中旬に各加盟館宛に郵送しました募集要項をご覧ください(全科協HP<<https://jcsn.jp/>>でも募集要項をご覧くださいいただけます)。みなさまのご応募をお待ちしております。



全国科学博物館協議会

全科協ニュース編集委員

石浜佐栄子(神奈川県立生命の星・地球博物館主任学芸員)

井島 真知(ベルナール・ビュフェ美術館学芸員)

南部 靖幸(熊本博物館学芸員)

西田 雅美(公益財団法人日本科学技術振興財団

科学技術館運営部主査)

平田慎一郎(きしわだ自然資料館学芸員(特命参事))

弘田 澄人(川崎市青少年科学館(かわさき宙と緑の科学館)

天文担当係長)

田邊 玲奈(国立科学博物館展示開発・博物館連携グループ長)

全科協事務局

国立科学博物館

科学系博物館イノベーションセンター

(担当:中山・河田・堤)

TEL 03-5814-9863 FAX 03-5814-9899

info@jcsn.jp

発行日 2023年11月1日

発行 全国科学博物館協議会 ©

〒110-8718

台東区上野公園7-20 国立科学博物館内

印刷 株式会社セイコー社